

中年エイジズムに対する仮想接触効果の実験的検討

嶋田 真実

これまで差別や偏見を減じる理論・方略として、接触仮説(Contact hypothesis; Allport, 1954)や、拡張接触(Wright et al., 1977)や、拡張接触(Extended contact; Wright, Aron, McLaghlin-Volpe, & Ropp, 1977)などが提起されてきた。しかしこれらは、偏見対象となる外集団成員と、直接または間接的な接触を要する。一方で、近年提起された仮想接触仮説(Turner & Crisp, 2010)は、時間・場所・人に関する制約を問わない。仮想接触は、自分が外集団成員とうまく交流できている場面を想像することにより、外集団への態度が好転する方法である。これにより、単に外集団のことを考えるよりも態度がポジティブになり、偏見の低減に有効であることが示されている。先行研究では、高齢者を外集団とした場合の効果が検討されているが、他の年齢層については未検討である。

本研究の目的は、中年に対する偏見・差別的なイメージの実態を明らかにするとともに、中年を外集団とした概念的追試によって、仮想接触の有用性について実験的に検証することであった。仮説は次の通りであった。仮説: 中年への仮想接触によって、中年に対する集団間不安が低減し、親近感が向上する。この仮説を検討するために、実験計画を仮想接触の有無(中年との仮想接触・中年についてのイメージ想起)の参加者間 1 要因 2 水準計画として Web 質問紙調査を行なった。

分析を行った結果、イメージ想起を行った場合と比較して、仮想接触をした場合の方が、集団間不安がより低減した。一方で、親近感に関しては差が見られなかったことから、仮説は一部支持された。中年との普段の接触頻度が少なくない点や、外集団との想像が容易で具体的想起を促す教示内容であった点が、集団間不安の低減をもたらした可能性がある。仮想接触は、中年との接触を行う上での不安は少なくするが、親近感を向上させる効果までではないことが示唆されるため、この方略はあくまでも直接接触における前段階として用いるのが有効的と考えられる。また、本研究と先行研究との結果を比較検討すると、大学生が中年と聞くと、「会社に所属し、経済・能力的に力のある自立している人」をイメージすることが示唆される。

本研究では、中年の定義を明確にし、性別・職業別等のカテゴリ分けを行わず、中年のイメージについて回答を求めた。したがって回答者が想起した中年像も多様であり強固なイメージを特定できなかった。今後は、中年の定義を明確にし、詳細な調査を行うことが必要である。また、仮想接触効果の一般化可能性を検討する上で、本研究で見られた効果が他の外集団を対象にした場合にも見られるかについて、今後検討することが望ましい。(社会心理学)